

附属幼稚園園舎移転落成祝賀会

附属幼稚園副園長 仲 渡 規矩子

うぐいすの声に迎えられ、附属幼稚園は、平成2年3月30日、広島市より落成なった西条キャンパスの新園舎へ移転した。例年より遅い4月20日、西条での初の入園式で、かわいい29名の4歳児を受け入れ、どろんこ遊びや追いかっこ、大きな箱積木で基地ごっこ、庭の山では木苺摘みや草すべりと、たのしい遊びが再び展開されている。

陣ヶ平山の緑を山桜が淡く色どる4月25日附属幼稚園園舎落成移転祝賀会が行なわれた。



本園は昭和41年、広島市千田町の広島女高師附属であった山中高等女学校の跡地に、広島大学教育学部幼年教育研究施設の研究園として創設され、以来24年になる。このたび、教育学部の移転に伴って西条の広大メインキャンパスの東北約1キロ、市道ブルーパール沿いに移転した。

幼児教育の目的として、幼児と共に創り出す環境の中で、幼児自らが遊ぶ主体的な遊びや活動を通して、自ら伸びていく意欲や力をひとりひとりの特性に応じて支えていくことをめざしている。同時に保育研究、研究会、学部との共同研究、実習等を行い、幼児教育のあるべき姿を追求し続けている。



園舎は山の樹々を背にした広い園庭に、遊戯室の大きな三角窓や、ガラスのトップライトを乗せた緑の屋根に、薄茶と白のタイルの壁で、かわいい丸窓や花の飾られた出窓があり、レースのカーテンが揺れている。425㎡の鉄筋平屋建の園舎は、天井の三角の採光窓から空ゆく雲が見える保育室が2部屋、143㎡の遊戯室があり、互にオープンに隣接している。それは年長年中児の自然な交流を促し、遊び場の選択の幅を拡げている。また座り込んで遊ぶ幼児のために床下暖房となっており、どろんこ遊びのためにシャワー室洗濯室も設けられた。ただ、2クラスの設置基準面積は少なく、園長室、教官室、保健室をはじめ事務、図書、応接、会議その他はすべて一部屋でまかなわざるを得ない。約3,000㎡の敷地の半分は山に面しており、園庭は山の斜面をそのまま生かし、自然と触れあって遊べる。他にも丸太のジャングルや砦を作ったり、高さ3mの土山やどろんこ沼など、自然の中で自然に遊べるようになっていく。そのうち子どもたちが登れる大きな樹やせせらぎの川や池もできるであろうと楽しみにしているが、さていつ実現するだろうか。



園舎落成式



移転落成式は4月25日午前11時から附属幼稚園園庭及び遊戯室で挙行された。東広島市幼稚園、保育所、広島大学、施設部、事務局施設工事等関係者約100名の方々の御臨席を賜わった。式典は落成のテープカットが学長、園長、市長、事務局長、附属学校部長、教育学部長によって行なわれ、新しい歴史の扉が開かれた。同時に園教官によってくす玉が割られ「祝園舎落成」の垂幕が下がり初夏の風に翻った。同時に園児とお母さんたちの手から、花の種をつけた100個の風船が、山頂に広がる澄んだ青空に放たれた。軽やかな音楽にのり風にのり、幼な子の夢をのせて高く飛んでいく色とりどりの風船に、しばし見とれたひとときであった。場所を遊戯室に移し、祝賀演奏として、弦楽四重奏 モーツァルト作曲「アイネ クライネ ナハトムジーク」が、教育学部市原、早川両教授と学生によって演奏された。美しい調べは新しい園舎の隅々にまで響き、落成の喜びが広がっていった。

次に教育学部教授森 林園長が挨拶を行い、本園の教育の特色は、幼児の生活そのものであり、成長の糧でもある遊びを中心に据えてきたこと、遊びは自己を表現していく自己実現の場であるが、これは環境に対して働きかけていく主体的活動でもある。木々の梢を渡る風の音が感じられる、まさに自然の息吹きと四季のうつろいを肌で感じるこの地は、私たちが理想とする遊び中心の幼児教育を実現するには、最適の条件を備えている。園舎の建築に当たり、関係各位のご好意ご苦勞に報いるためにも、また明日の社会を担う子どもたちのためにも、幼児教育の道に心新たに努力して参りたいと抱負を述べた。



続いて田中隆莊学長、讃岐照夫市長、片岡徳雄教育学部長のお祝辞を頂き、幼児が自然の野生の生き生きとした生命と交る保育の視点を掘り下げるよう期待すること、学生にとって身近かに研究や実習の場ができたことの意義などについてお言葉をいただいた。



次に、園舎建築をご担当頂いた大之木建設と、丸太遊具創作の保存科学研究会に感謝状と花束が渡された。

祝賀会は、教育学部幼児学教室主任祐宗省三教授の乾杯で始められ、祝宴は賑やかに和やかに進んだ。最後に、附属学校部 寺川智祐部長の乾杯により、感謝と希望の宴は幕を閉じた。

園舎落成に至るまで、文部省をはじめ、本学の先生方、本部事務局、施設部、建設会社附属学校部のご尽力や、幼研学生のご協力に対し、心より深甚の感謝を捧げる次第である。